様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７９２３８８

研究課題名（和文）慢性疾患を持つ被災者が健康管理を継続するプロセス～生活の場の変化に焦点を当てて～

研究課題名（英文）The process that disaster victims who have a chronic disorder continue their health management ~Focusing on the change of place to live ~

研究代表者
清水　誉子（Shimizu, Takako）

福井大学・医学部・助教

研究者番号：００５５４５５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,700,000円、（間接経費）　510,000円

研究成果の概要（和文）：60歳代～80歳代の対象者16名にインタビュー調査を行った。被災後の健康管理として、被災直後は治療のことは頭にない状況であるが、その後支援を受けることや、体調の変化に合わせて対処するなど、生活の場が変化する中でも被災前からの習慣を何とか続けることで管理していることが分かった。また、75歳未満の高齢者は新しい人間関係の中での役割や楽しみを見出すことでも健康管理を行っていたが、75歳以上の後期高齢者は周囲に言われるがままに行動することや、周囲への迷惑を考え我慢する等、年代による特徴も明らかになった。

研究成果の概要（英文）：I interviewed 16 subjects between sixties and eighties. As a post-disaster health management, they couldn't consider about treatment just after the disaster,but since then,it was found that they kept themselves in good health by continuing their old habit somehow or other since before the disaster during the change of their place to lives,such as receiving a support and getting in shape. Besides, the feature by age also became clear, such as the elderly people under the age of 75 controlled their health management by finding their own part and amenity during the new relationship whereas the elderly aged 75 or over acted as directed by others around them and restrained themselves in mind the nuisance for people around.

研究分野：医師薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：被災者　慢性疾患　健康管理

１．研究開始当初の背景

災害看護では、災害サイクルすべての時期に看護介入が必要である。特に災害発生後早期から被災者自身の自立した生活に向けて健康管理ができるよう「生活環境」の整備が必要である。災害発生時にはスタッフ・医薬品・医用材料等の不足の中殺到する負傷者の治療に当たらなければならず、高血圧や、糖尿病等慢性疾患の対応は２次的となる（坪井, 1995）。災害の慢性期に移行しても、日常生活を送る場所の変化、片付け等の被災後特有の作業、物質的制約、持続するストレスがあり、慢性疾患をもつ被災者は被災前に比べ、疾患のコントロール状態に悪化がみられている（村上, 1997, 2007；江部, 2005；松尾, 2000；歌川, 2007；片桐, 2007；丸山, 2007）。

また、ストレスと慢性疾患の関連に関しては数多く研究（宗像, 1998；池田, 2002；清野, 2010；内海, 2004；高橋, 2001）されており、災害時の様々なストレスが慢性疾患に影響を及ぼすと考えられ、阪神・淡路大震災の避難所での調査（辻内, 1996）でも、慢性疾患の存在が精神身体症状出現の大きなリスクファクターであり、慢性疾患を持つ者が災害時の影響を受けやすいとされている。

２．研究の目的

過去（2000 年以降）に発生した自然災害（地震・水害・噴火・豪雪）で、継続治療を必要とする慢性疾患を持つ被災者が、被災後刻々と変化していく周囲の環境や状況に合わせてどのように健康管理を行っているのかを明らかにする。

３．研究の方法

（１）調査対象：被災により慢性疾患の自己管理が害された者のうち、研究の同意が得られた者。

調査方法：半構造化面接

調査場所：調査協力施設及び災害現場でプライバシーの保たれる場所

調査内容：①対象者属性：年齢、性別、災害の種類、被災状況、被災後経過日数、日常生活を送る場の変更の有無、現病歴、既往歴、治療状況

②調査協力者の自由な語りを引き出すため、「災害直後、生活はどんな状況でしたか」を導入とし、「被災後、健康管理に関して困ったことは何ですか、それに対してどのように対処しましたか」と進めていく。その中で以下の点にも触れていく。

③健康管理状況：食生活、薬剤管理、通院状況

④被災前、後の健康管理の経時的変化

⑤生活支援の有無あるいは具体的内容

（２）インタビュー内容の逐語録を作成し、語られた文脈を重視し、「被災後の生活の状況」や「被災後に健康管理に関して困ったこと、それに対してどのように対処していったか」について、語りの中から単独で理解可能な最小単位の言葉や文節を取り出しラベル化した。それらの意味を解釈し、同じ意味を示すラベルを集めてカテゴリー化し、カテゴリー名をつけた。

４．研究成果

（１）平成 24 年度

①対象の属性：対象者 10 名の年齢は 60 代 1 名、70 代 2 名、80 代 7 名であった。性別は男性 3 名、女性 7 名であり、全員家族と同居していた。

②変化する生活環境における健康管理

慢性疾患を持つ老年期の被災者の変化する生活環境における健康管理として 5 つのカテゴリー【治療のことは頭にない】【治療や日常生活の習慣を継続する】【置かれた状況の中で調整する】【周囲からの支援や支援の依頼】【必要性を理解しながらもできない】が抽出された（表 1）。

表 1.平成 24 年度対象者のカテゴリーと
サブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
置かれた状況の中で調整する	ほっとする人とのつながりを継続する
	限りのある中でできるだけ調整する
	身体状態に合わせて危険な行動を回避する
周囲からの支援や支援の依頼	周囲に言われるがままに行動する
	自分でできないことは家族に頼む
	生活維持のため公的サービスを利用する
	身近な人からきっかけをもらう
治療のことは頭にない	慌てており治療のことを思う暇がない
	他に考えることがあり治療のことを忘れていた
必要性を理解しながらもできない	運動を習慣化しようとしても続かない
	周囲へ迷惑をかけられないため我慢する
治療や日常生活の習慣を継続する	いつもの対処法を継続する
	治療だけは続けないといけないと思い何とかしようとする
	日常の食生活を継続する
	症状の悪化を防ぐために自分がいいと思うことをする

（2）平成 25 年度

①対象の属性：対象者 6 名の年齢は 60 代 3 名、70 代 3 名であった。性別は男性 1 名、女性 5 名であり、全員家族と同居していた。

②変化する生活環境における健康管理

慢性疾患を持つ老年期の被災者の健康管理として 5 つのカテゴリー【直後は自分のことも考えない】【いつもの習慣をなんとか続ける】【変化に合わせて対処する】【専門職にお願いする】【新しく励みになるものを見つける】が抽出された（表 2）。

表 2.平成 25 年度対象者のカテゴリーと
サブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
いつもの習慣を何とか続ける	長年の友達付き合いを続けて元気をもらう
	以前からの楽しみやストレス解消法を続ける
	内服を続けるために何とかする
	いつもの健康維持の習慣を続ける
新しく励みになるものを見つける	楽しみを新たに見つける
	新人間関係の中で役割を見出す
専門職にお願いする	専門職のアドバイスを守る
	公的なサービスを利用する
変化に合わせて対処する	体調の変化や自覚症状に合わせて対処する
	環境の変化に合わせて状態の悪化を予防する
	状態が気になりながらも症状がないため治療を中断する
直後は自分のことも考えられない	直後は頭に何もない
	別のことに精いっぱいで自分のことも考えられない

以上のことから、被災後の健康管理として、被災直後は治療のことは頭にない状況であるが、その後支援を受けることや、体調の変化に合わせて対処するなど、生活の場が変化する中でも被災前からの習慣を何とか続けることで管理していることが分かった。また、75 歳未満の高齢者は新しい人間関係の中での役割や楽しみを見出すことでも健康管理を行っていたが、75 歳以上の後期高齢者は周囲に言われるがままに行動することや、周囲への迷惑を考え我慢する

等、年代による特徴も明らかになった。よって、同じ高齢者という年代でも年齢によって健康管理の特徴に違いがあるため、その特徴に合わせたアプローチ法を考慮していく必要性が示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　1 件）
①清水誉子、酒井明子、繁田里美、麻生佳愛、森祐子．慢性疾患を持つ東日本大震災における老年期の被災者の健康管理、日本災害看護学会第 15 回年次大会、2013.8.23、札幌コンベンションセンター

６．研究組織
(1)研究代表者
清水誉子　（SHIMIZU, Takako）
福井大学・医学部・助教
研究者番号：00554552